

洛星新闻

十周年
記念特集号

しないもの

十年間の補導を振り返って

フランソワ・アラール

今回はアラール神父に、補導部の立場として、一筆とつてもらふことにした。

洛星の創立十周年を迎えて、私はこの機会に、この学校の「輔導」についての歴史を振り返り、また未来を考えてみたいと思います。十年間に洛星はどのように変化しましたか。確かに洛星は変化してはあります。「変化したもの」と「変化しないもの」とがあります。それでは、何が変化し、何が変化しなかったのでしょうか。変化したのは「方法」です。変化しなかったのは「方針」です。これはこれからも同じでしょう。

最初に洛星の輔導で「変化したもの」について述べてみましょう。洛星には多くの規則があります。そして、これを守らせようとしている学校の権威を皆さんは常に感じていると思います。そこで皆さんは、他の多くの学校と同じように、洛星は何故もつと自由にしないのかという不安を持つこともあるでしょう。ところが、洛星の方針は少し違ふのです。即ち、カトリックの考え方では、教育者は青年を導くために「どうしても正しい」としか思われないことは、どんなことがあっても、与えなければならぬという方針なのです。だから、洛星では「静粛」・「時間厳守」・「礼儀作法」・「美化整頓」等の大きな規則は十年たつても変えないのです。二十年たつても、ひよつとした百年たつても変らないでしょう。

次に、「変化したもの」について述べましょう。確かに方針は変わりますが、方法はその時に最も良いように変化します。ですからこの学校でも中学生だけの時と、高校生ができてからと、多くの卒業生の出た今とは色々変化がありました。中学生はまだ子供ですから、良い習慣をつけるために、時々規則を強制しなければならぬかもしれませんが、しかし、高校生はもう大人に近いですから、自分で判断する力があるはずです。そういう意味で輔導が上からだけでなく下からも、前からだけでなく後からもするようになってきました。（これは決して私が、よくいたづらをして皆さんのお尻を後からたたかたことと関係ありません）

監督や強制を余りしないで、もしもできたなら全然に、静粛が守れ、時間が守れ、礼儀作法や美化整頓がよく行なわれるような雰囲気を作り上げたかと思うようになって来たのです。しかしこれは非常に難しいことです。監督や強制がないとすぐにやかましくなり、きたなくなるでしょう。これでは何もありません。

だからといって、私は毎日怖い顔ばかりして、学校の中を歩き回るだけで満足できるでしょうか。勿論、私はもつと皆さんと話したり、遊んだりしたいし、また私の生命といつてもよい宗教について多くの人に知らせるために働きたいのです。

皆さんも監督の強制はかりの学校は余り好きではないでしょう。また、すぐくしゃみしてきかない学

校も好きですか。私も同じです。出来るだけ監督や強制をしないしかも静かできれいな学校とあってほしいのです。これはできないでしょうか。皆さんと私達努力したら必ず出来ることです。今から大いに努力して、出来るだけ早くそれを成功させようではありませんか。

そして、今学校にいる皆さん卒業しても、いつもこの学校を自分の生まれた家を持つと同ような、誇りと親しみを持つ

星	想
洛	回

新聞局
者に洛星
ついでに
想記を書
てくれと

われて、もうこのほくが回想記書かなければならない位古願に つたのか、そしてそんなほくが 想記を書かなければならない破 になるのが、この学校の特色の つかもれない等と、くすくす と思いつつも何もよい考えが浮 ないままに、締切の日を一週間 上もたつた今やつと進まぬ筆を り上げた次第である。何か書い ているうちに、そのうちに回想め たことも浮んでくるだろう。

ずつと高学年ばかり受持つて たので現在洛星でなじみの学年 高2の中3だけでこの回想記も ういう意味で何だかかたよって まいそうな気がする。

十年一日の如く毎日同じ教室 同じことをあきもせず教えて いるだけでも、君達の心の

洛星
回想

心にはいついてゐる。……
を君達と一緒にできる
レベルでたの共々苦
苦しみの中から何かを
行くことがほくのいつ
る教育の意味、人格の
しての学校の存在理由
ら、ほくはいつもいわ
ゆる教えるといふこと
は学校に於ては第二義
的なものだと思つてい
る。(そこでなければい
このほくにとつて教
師なんかつとまるもの
か)
こゝ数年の間洛星は
いい意味でも悪い意味
で変貌をとけてきた。こ
れにあらがひながらの四
星とは全くちがつた学
校に來ていても、ほ
るよさがあつた。し
いい方、變つたのは建
と組織とかの外面的

中学生徒会長
菅君信任される

中学生徒會長信任投票の結果、信任一百七十六票、不信任一百四票、無効一十票となり、菅安君（三・C）が生徒會長に決定した。そこで今後の抱負を書いてもうけてみた。

生徒会に積極的に

會長 菅 宏

生徒会は生徒全員を基盤とする一つのものである。

のものの、生徒会を
生徒会を
生徒会を
生徒会的活動
遊んだり
つた。こ
生徒会は
生徒会の
的的活動
感ある機
たこの機
した生徒
力をする
にほくの
の成長
なら、同
しでその
取組出す
考えてい
りの場と
なのだか

しかし、いくら僕が一人で頑張り
つた所でしている。皆さんの協力
が必要なんだ。それで皆さんに
は、生徒会と直接関係のあるクラ
ブ活動を活発にしていきたい。
去年の生徒会が生徒全員のクラ
ブ加入を実施されて、全員がクラ
ブに加入したのはすなわであるが、
しかしまたクラブに所属していな
い人が、少なくないようなので、
もう一度調査して、生徒全員クラ
ブ加入を完全に実施したい。それ
と共にクラブ調査委員の人に、そ
れ特に働いてもらってクラブ活動活
発化を計りたい。そしてクラブ活
動を計画しよう。

りて最も本質的なものである君達
自身の問題については、却つてそ
の逆であるような気がしてならな
い。君達生徒とぼくとの年齢差が
一年毎に必要な程のひろがつて行
かなのかも知れないが、君達が
一年毎にだんだん子供っぽくなる
くせこそかく見えてくるのは二

今とは違
当時

英語科

でも大きな
一つ毎日
の想い出
五年前の落
校に来てい
かしても
なか設備
ものほか

体うしたわけだろう。何もGでold daysを云々するわけではないけれど君達の先輩の一期生、二期生、三期生あたりは変わった奴もたくさんいたがともつともスケールが大きかった。一昔前高校生のホーッさせる連帯感とか設備の中が何人もいたものだ。少くとも

今とは違つた
当時の生徒

英語科 緒方登摩

取り虫でもなかつた。勉強を少し
 くらい犠牲にしてもかかげがえの
 ない若さをエンジョイしていた。
 人生に対する物の見方というもの
 がまるきり今の君達とは異つてい
 たような気がとする。何が自分に
 として一番大切でかかげがえのない

つた の生徒

緒方登摩

ものであるか、というところを近視
 眼的にはなしにもつと高い立場
 からしつかりと掘進していたような
 気がする。だから点取り虫ではな
 かつたが、そのくせ勉強に対する
 熱意は君達以上のものであつた。
 次に挙げるのは高一の時白血病で
 この世を去つた三期生の上島君の

やつてくる。必然成績は下るだらう。しかし下つてもいい。下りこ
 こちは満点だから。先づぼくは虚
 栄を排すべきだ。ぼくはぼくの実
 力以上に点がついたことしたらそれ
 に對していやな顔をむき出してや
 る……」

「一番よい大学の一番就職率の

からといつて誤解して
 はならない。なまける
 ことでは決してない。
 勉強することは絶対必
 要なことだ。ただ試験
 のため勉強するのは馬
 鹿けている。下らぬと
 思つたらしないでよく
 その結果が成績として

第十期生

待ちに待った入学式

運動場の小さな桜の木にも、よつやくつほみがふくらみ始めた四月八日（土）、中学・高校一年生の入学式が行なわれた。高校一年生はさほどではなかったが、中学一年生はさすがに嬉しさを隠せぬ、といった表情であった。

高校の方は午後一時より始まり、中学の入学式と同じ内容で進められ、代表として北川米吉君の希望と決意に満ちた宣誓があつた。中学に比べて、ごく簡単に形式はつた内容で行なわれた。

▼いよいよウイブ
ール学園も本年度で満
十周年を迎え、益々発
展の途上にある▼とい
いたくところであるが
、実のところそれは学
校の設備だけである。できたての
ころの洛星の校舎は中学校舎だけ
で、三年後に高校校舎、そしてそ
の後三年後に体育館が建てられた
。理科の実験室の設備もたんだん
立派になって来し、中庭に木も
植えられ、つい最近立派な校門
が出来たところである▼しかし、
生徒自身はどうか。昔はお金
がなくなったり、傘がなくなつた
りしたことは決してなかった。か
りに傘がなくなつていても、次の
日には必ず返つていた、というこ
とである。現在の洛星はどうかあ
るうか。悲しいかな、傘はなくな
るし、時にはお金さえなくなる。
もちろんこれはごく一部の生徒の
行為に過ぎない。しかしこれらの
生徒のために、洛星は多に墮落
してしまつたのである。洛星をこ
まで窮してこられた先輩の方々に
何と言つたらいいのであろう。し
かし、何も溢難に限つたことでは
ない。校舎内で時として静粛が守
られなくなり、大声、奇声、口笛
など何ともいへぬ雰囲気に入る
ことがまれでない。椅子と机を針
金で結んで、坐れなくて困つてい
る生徒を見て喜ぶまことに幼稚な
生徒もいる。また廊下で相撲を同
級の気兼ねもなしにする生徒もい
る。下級生は上級生を見くびり、上級
生は教師を見くびることもある。
十年もたつたのに生徒の向上が余
りないのは、生徒自身の自覚がな
いからではなからうか▼しかし、
必ずしも、生徒の向上が余りない
とはいえない。勉学の面ではずつ
と充実して来た。現に昨年度の大
学入試で輝かしい成績を上げたこ
とが多いにそれを物語つてゐる。
図書館の書籍も年々数を増してい
る。しかししわれわれを教へ導いて
下さる先生方に関しては決してわ
れわれを満足させていない。例え
ば、良い先生であつても、本の三
・四年間だけ学校にとどまられ
後はどこへ行かれるのかや、授
業に積極的でないことなど。これ
が改められるならば洛星は勉学方
面に於てはもつと発展、得るので
はないだろうか。

この躍進に続け！！

京大へ四〇名

後輩の責任重大

今年度の大学入試において本校の卒業生は未曽有の好成績を上げたことは諸君も存知と思うがその結果を改めて報告することにする。

輩の多くが志望した京大について述べると、本校の第四期生は学校側の予想をはるかに上まわりの十八名が京大に入學した。この数はいうまでもなく京都二で浪人と合わ

鴨沂洛北紫野に次ぎ第四位、全国でも第九位で大学受験専門の学校（？）難高校よりも本校の方が一人合格者が多い。

また合格率は本校の五十一パー

まず地元の国立大学で我々の先、せて四十人という成績は京都では「セント（浪人を含む）」が京都一、

大学名	①	②	③	④	計
同志社大		1	18	15	34
立命大		2	2	6	10
早稲田大			3	2	5
関学大			5		5
甲南大			2	2	4
慶応大			3		3
関西大学		2		1	3
日本大		1		1	2
法政大		1		1	2
京都薬大			2		2
中央大		1			1
立教大			1		1
関西医大		1			1
龍谷大		1			1
桑沢大	1				1
小計	1	10	36	28	75

国・公・私立大学合格者合計	
1 期生	2
2 期生	15
3 期生	68
4 期生	64
総 計	149

(註) ① は 一期生
② は 二期生
③ は 三期生
④ は 四期生

その他主なものは、京都工織の七名、大阪外大の四名、阪大、京都府立医大の三名、東大、神戸商大の二名、私立大学では同志社の三十四名、立命館の十名などである（表参照）

この素晴らしい成績はすぐ朝日、毎日、読売などの大新聞にも報じられたが、我々洛星の生徒にとつては喜ばしく又はれがましいものである。一躍「名門」となった洛星に学ぶ我々は先輩の築いたこの成績を下げることなく上げるようにしたいものである。

同志社中学校の巻

同 校 訪 問

ちやうど土曜日の昼
 だつた。そろそろ出て
 来る所を逆にはいつて
 行くわけだからジロジ
 ロジロ。やつこの思い
 で校門をはいる。む
 くむとビルディングが立ち並ん
 でいる。新しいの古いのがいり交
 つて目にはいりまなしたいで、
 左右対称の世界に住んでいる記者
 には異様だつた。聞くところによ
 る近代的名方は大学と關係ない
 うられた。す
 とこの新聞
 るよに部員
 られるが、我
 そい感じた。
 こたこた
 主徒会のこと
 は会長のもの
 委員会があり
 務、図書、公
 がある。それ
 そつ予算はと

つと並ばれて見る
のどから手の出
はしいといつてお
洛星新聞部も心ば
やべつて、いよい
に及んだ。生徒会
評議委員会、執行
執行委の下に庶
、美化の各委員会
会期は一年。そう
ついで、我々洛星で
つい最近建つたという格舎は見
入というのは結構すぎるのではない
かと思われた。あいにく試験近
くでクラブ活動をしている生徒を
見かけることは出来なかつたの
で、この活発さはつきりとは
わからなかつたしである。か
んじんの生徒会の方は、来年度
(今年度にあたる)の会長候補者
の名があつちこちにはりつけて
あつた。四、五名連ねてあつた
り、各クラスからの推薦というこ
と。全体からいつてクラブ活動も
これも活発らしいことは想像され
た。

ないか、後には映画用スクリー
ンがあつて便利。色々の資料も
り付けてあり、洛星にはないもの
だけに目についた。その横に資料
室があつたが、地理の模型や、古
美術品が多くあり、このクラブ
は発掘もやるそうで活潑な動きを
示している。

その他に醇厚館というのがあ
り、これも改造されていて、一階
に工業室、一階に視聴覚教室、各
種集会所とある。一階の作業室
などは設備もとのつていてうらや
ましい限りである。えーと、さつ

いよいよチャペルまでやつて来た。このチャペルは國宝級ということ。中にはいつてみると荘嚴な感じになる。ステンドグラスも大変きれいだ。ここで毎朝礼拝が行なわれるとのこと。が、宗教に關してはあまり関心が無いということ。大事なことを忘れていた、この学校の創立はというと明治八年のことだそうだった。チャペルもその当時からある。幸いにも図書館に創立時の写真が飾つてあつた。

最後に、先にいつた公安委員といふのはちょうど洛星の風紀委員のようなものでよく働いておられる。地下の食堂にも見回りに行くとのこと。又職員室に桶が置いてあり掃除状態の一番よいクラスに与えられるということ。

三年生の人はずつ一月月足すでこの学校とも別れということであつた。外には雪も降り出し、我々記者もおいとますでここにした。

大西君のアメリカ便り

去年の九月二日、日本をたつてアメリカ、ルイジアナ州のシエ
ルポポートへ行かれた大西弘君（当時高一生）の便りをお父様に
お貸りして、その中から四、五載せることにしました。

玄関の所でヒクヒクしながら、自動車のあかりがみえたらどうしようと思つて、ウロウロしていましたが、先コラムベーターが肩つ

を完っているか、二階でウロウロしているがトリリンリン。食事を知らせるベルがO・B（男中）の手

みんな聞いてくれ

僕の夢を



私がこの拙文を書いているのは、
単に洛星に刺激を与えて発展させ
ようという心持からである。それ
だからこそ、思いついたままの夢
を、そのまま書き連ねているので
ある。僕の夢が、表現性に乏しい
のも、そういった考えからであ
る。諸兄の中に、もし僕の夢にヒ
ントを得て、もつと現実的な夢に
翻訳して、それを実現しようとする
方が出て来られるならば、これ
なつた。僕もあのようなことをい
つた手前、一応文芸部員に属したわ
けであるが、実際の仕事は殆んど
文芸部幹部で行われてしまい、自
分は文芸部執筆部員というような
拾好になつてしまつた。これに対
して少なからず不満がないわけ
でもなかつたが、一応何よりも先づ
雑誌を発刊することだと思ひ、発
刊には協力して来た積りである。
そうしてどうやら文芸部

の考へては、なかなかつたのである。H三の下間君も僕のような構想のもとに書いておられたやうである。この点からいつて、「赤土」は僕等の期待していたやうなものではなかつたといえる。一体このクラブを調査していてもわかつたことだが、今必要とされているのは、クラブ研究発表等も載せられる幅の広い総合雑誌である。文学者の僕の思つに、私達の文学などとは、誌「はもはや夢をみるだけでは、私には気の納まりないものとなつてしまつた。H二の方で、すでに僕の夢のような雑誌発刊の動きがあるが、文芸部の方々よ、あなたがどうしても文学にとまらねばならぬのなら致し方ないが、もしそうでないのなら、「赤土」の発展を考えられて、「みんなの雑誌」にされんことを願う次第である。H三 小池曉彦

